

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	明治期再興後の咸宜園
Author(s)	鈴木, 理恵
Citation	教育科学 , 32 : 1 - 35
Issue Date	2020-03-01
DOI	
Self DOI	10.15027/49152
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049152
Right	(c) 広島大学大学院教育学研究科教育学教室
Relation	



明治期再興後の成宜園

鈴木理恵

はじめに

咸宜園は、文化一四年（一八一七）、豊後国日田（現・大分県日田市）に広瀬淡窓（一七八二—一八五六）によって開設された漢学塾である。明治七—十二年の中断をはさんで、同三〇年（一八九七）まで命脈を保った。

日田は、幕府直轄地であったことから代官（西国筋郡代）が置かれ、九州諸藩から代官所への取次を担う御用達や代官所の公金を扱う掛屋が軒を並べた隈町・豆田町を中心に経済が発展した。淡窓は、御用達を勤める広瀬家の長男として豆田魚町に生まれた。しかし、病弱であったため、家業は弟久兵衛に譲られた。淡窓は教授の道で生計を立てることを決意し、文化二年（一八〇五）に開業した。当初は塾舎を転々と変えていたが、文化一四年に堀田村に移って塾生との共同生活を開始してからはこの地に落ち着き、咸宜園を名乗るようになった。それ以来、旭荘（淡窓の末弟）に塾政を譲った天保元年（一八三〇）末—同七年三月を除き、死去の前年まで塾主を務めた。淡窓は、月旦評による実力主義、厳格な規約による塾内統治、漢詩重視といった独特の教育方式を確立した。淡窓には子がなかったが、青邨（淡窓の門人）や林外（旭荘の子）が養子となって塾主を継承し、明治四年（一八七一）に林外が上京するまで隆盛を誇った。この間、全国から約四二〇〇名の入門者を集めた。このようなことから、咸宜園は「近世最大規模の私塾¹」といわれ、その研究は江戸時代、とりわけ淡窓塾主期間に集中している。²

いっぽうで、明治一三年再興³後の状況はほとんどわかっていない。塾主⁴や塾生数といった基本的情報については、中島市三郎や咸宜園教育研究センターによって示されている。ほかに、高倉芳男が閉鎖時の教師であった勝屋明浜の動向を明らかにし、森眞理子が明治二〇年代前半に校主を勤めた諫山菽村の書状を整理している。溝田直己は学則や開校式記録などの新出史料を紹介している。⁵ これら断片的な研究にとどまっているのが現状である。

明治期の私塾に関する研究には一定の蓄積がある。入江宏は、近代的教育システム、とりわけ中等教育制度が整備されるまで、私塾が基礎教養形成の場や予備校的存在として固有の機能や意義を有したと指摘した。近年では、池田

雅則が新潟県の長善館を事例に、ノンフォーマルな教育機関が独自の役割を果たしたことを実証的に明らかにし、明治期の私塾が重要な研究対象となることを示した。⁶⁾

本稿では、入江や池田の研究成果に負いながら、明治期咸宜園の学則や塾生の動向をみることで、その役割について明らかにすることを目的とする。先述したような特徴的な教育方式は近代教育の先駆と評価されるが、再興後の咸宜園は果たして近代教育にどのように対処したのか、なぜ閉鎖に至ったのか、このような問題関心から明治期の姿を追ってみたい。

本稿で使用する史料は、主として、大分県の学事年報や統計書、咸宜園の入門簿や学則などである。入門簿は、『増補淡窓全集』に収録されたもののほかに、再興直後の「瓊林義塾入門簿」を使用する。学則は、国文学研究資料館広瀬青邨文庫、日田市の廣瀬資料館先賢文庫や咸宜園教育研究センターに所蔵されている。⁹⁾なお、本稿で史料を引用する際には旧字体を新字体に改めた。

1 淡窓の遺規にもとづく再興

(1) 瓊林義塾の閉校

明治初期に閉鎖された後、咸宜園の家屋は人手に渡り郡役所や米会所として使用され、庭園は荒廃して昔日の面影を失っていた。淡窓の門人である諫山東作（一八二五—一九三、号は菽村）や椋野元卓らは地元でそのありさまを憂えているうち歳月は流れた。¹¹⁾村上慎次（一八一八—一九〇、号は姑南）は、明治十二年（一八七九）冬に偶々日田を訪れた際、菽村からその話を聞いた。姑南は、豊後国下毛郡中摩村の出身で、天保五年（一八三四）三月に咸宜園に入門し、同一一年九月末の月旦評改めて権九級下に昇り、同一二年四月から同一三年初めにかけて都講を務めた経歴を持つ。大婦（卒業）後は医学を修め、帰郷して医業のかたわら漢学塾を開いていた。¹²⁾菽村の咸宜園再興への思いに共感

した姑南は、中摩村の家を義子に托して日田に移り住むことを彼に約束する。明治一三年三月一日に「義校」が落成し、広瀬淡窓の木像を据えて開校式が執り行われた。校名には咸宜園旧号「瓊林」を採用した。¹⁵

『大分県統計書』には瓊林義塾の開校時期が明治一三年七月と記されているので、開校式からしばらく経って届けが提出されたようだ。校主として椋野元琢(マキノ)の名が記載されている（後掲表1参照）が、教師は姑南のみであった。明治五年「学制」頒布後、私塾は開業届けを提出することが求められた。なかには中学校として認可されたものもあった。明治一二年「教育令」で「中学校ハ高等ナル普通学科ヲ授クル所」とあまいな規定がなされたためである。しかし、明治一三年に文部省は、中学校が備えるべき諸学科を完備しない場合には「各種学校ノ部類」とするよう指令した。¹⁴これによって、私塾の多くは各種学校として位置づけられることになり、瓊林義塾もそのひとつであった。

「瓊林義塾入門簿」¹⁵によると、最初の入門は三月二十九日付である。同年の入門者数は一五名にとどまり、そのうちの九名を豆田（南・北豆田村や豆田町）出身者が占めた。地元住民に支えられての再出発であった。開校初年の入門者が少ないのは、塾の場所が定まらなかったことが影響したのかもしれない。同時期に公立教英中学校が咸宜園跡に開校したため、瓊林義塾は日田郡内の上手村や旧官府近くを転々とせざるを得なかったようである。翌一四年四月に教英中学校が北豆田村に移転した後、諫山菽村が広瀬本家に対して旧咸宜園東側を姑南に使わせるよう依頼して、姑南らはいよいよ南豆田村の咸宜園跡に落ち着くことができた。¹⁶またその翌月には、広瀬本家に保管されていた咸宜園蔵書の一部を瓊林義塾に借用することができ、塾としての態勢が整えられた。¹⁹

開校時に作成された「庚辰改正瓊林義塾規則」（以下「瓊林規則」と略記）は、咸宜園で天保一二年（一八四一）三月に布かれた「辛丑改正規則」²⁰（以下「辛丑規則」と略記）をもとにしたとみて間違いない。両規則が、項目編成や各則の順番・内容・文体（候文）などの点で共通しているためである。姑南は、「辛丑規則」が布かれて間もなく都講に就いたことから、自らが経験した規則を瓊林義塾に導入したものと考えられる。

「瓊林規則」は五項目四三則から構成されており、その内訳は職任三・飲食一〇・出入一〇・用財七・雑一三であ

る。「辛丑規則」は五項目五三則から構成されており、その内訳は職任四・飲食一五・出入一一・用財八・雜一五である。「瓊林規則」全四三則のうち三七則は、「辛丑規則」とほぼ完全に文言が一致する。残る六則については、それぞれの一部が「辛丑規則」から削除あるいは加筆・修正されているが、ほとんどが軽微な変更にとどまる。たとえは、「辛丑規則」で「酺日（塾生が揃って塾主に拝謁する儀式がおこなわれ、終わると酒食を許された―引用者註）ハ毎月廿七日ニ定メ其外ハ五節句并ニ休日之分ニ可致事」となっていたのが、「瓊林規則」で「酺日者毎月一日十五日廿七日其外祭日ニ極メ休飯ニ可致事」とされている。これらは、時代の変化に伴って改正されたものであった。「辛丑規則」にありながら「瓊林規則」で採用されなかった一〇則についても同様の理由で取捨選択されたのである。

教育の実態を示す史料としては、明治一六年一月から翌年一月までの村上姑南の日記「災後記事」が残るのみである。日記には、朝に『易経』、『詩経』、『論語』などが、夜に『遠思楼詩鈔』（広瀬淡窓の詩集）が講じられたことが記されている。淡窓は詩集とそれ以外の書を恒常的に併行して講義したが、瓊林義塾においても漢詩に重きを置いていたようすがうかがえる。一二月二九日条には翌年一月の月旦評を作成したことが、翌日条には講堂に月旦評を示したことが記されている。塾則といい月旦評といい、瓊林義塾が淡窓時代を踏襲した教育をおこなっていたことは明らかである。

(2) 宜園保存会の発足

瓊林義塾は明治一三年から一七年まで五年間続き、「瓊林義塾入門簿」に記載された入門者総数は表1に示したように二三一名に及んだ。そのうち年齢がわかる一九二名の出身地を表2にまとめた。最低年齢が九歳、最高が二七歳で、平均一六・八歳であった。低年齢層には日田郡出身者が多く、一〇代後半以降には他郡や大分県外の出身者が多くなる傾向があり、一九〜二〇歳では九州以外の遠隔地の出身者が比較的多くなる。大分県出身者が全体の六割を占める。県外では福岡県出身者が最も多く全体の二割以上を占め、九州では長崎、熊本、佐賀と続く。九州以外では秋

表1 瓊林義塾・咸宜園の生徒数の推移

年(明治)	校名	教授者数	学校長(首座教員)	入門者数	生徒数	卒業生徒数	中途退学者数	所在地	学科	学習年限	収入(円)	支出(円)	典拠			
13	瓊林義塾	1	—	15	30	—	—	南豆田村	漢学	—	99	119	16統311・315頁			
14		1	椋野元琢	40	39	—	2			—	3	196	203	一覽1300頁、18統320・323頁		
15		1	—	80	112	4	51			—	—	408	377	16統311・315頁		
16		1	—	71	71	5	62			—	—	447	427	16統311・315頁		
17		1	—	25	65	—	21			—	—	180	180	17統328・332頁、18統323頁		
18		2	—	113	68	—	—			—	—	180	180	18統317・320・323頁		
19		3	—	53	83	—	—			—	—	210	210	19統326・329・333頁		
20		2	—	36	50	—	—			—	—	210	210	20統333頁、22統306頁		
21		咸宜園	1	諫山東作	17	40	—			?	豆田町	漢学	5	120	120	21学34頁、21統319頁
22			1		21	30	—			?			5	90	90	22学33頁、22統304・310頁
23	1		23		26	2	?	5	78	78			23学36頁、23統286頁、25統303頁			
24	1		19		20	3	?	5	60	60			24学31頁、24統302・308頁			
25	1		7		18	—	?	5	65	65			25学45頁、25統296・303頁			

出典：入門者数は「瓊林義塾入門簿」および咸宜園入門簿（『増補淡窓全集下巻』所収）から採り、その他の部分は典拠欄に示した資料をもとに作成した。資料名は、以下のように略記している。

一覽：『明治十四年学校幼稚園書籍館博物館一覽表』文部省、1892年

16統～25統：『明治十六年大分県統計書』～『明治二十五年大分県統計書』

21学～25学：『明治二十一年大分県学事年報』～『明治二十五年大分県学事年報』

田、新潟、岐阜、三重、大阪、兵庫、広島、愛媛など広範囲から来ている。のちの時期に比べて低年齢層が多い傾向にある。たとえば、日田郡豆田町の広瀬貞治は、小学中等科に通いながら瓊林義塾で学び、明治一八年に教英中学校に入学した。²³⁾この貞治のように、低年齢層には小学校通学の傍ら瓊林義塾で漢学を学ぶという修学スタイルをとっていた塾生が少なくなかったのではない

表2 瓊林義塾の入門者の年齢と出身地

年齢	大分県			他府県		合計
	日田郡		他郡	九州	九州以外	
	豆田	他町村				
9～11	4	6				10
12	3	6	2	1		12
13	6	5	2	2		15
14	3	9		2		14
15	4	7	4	3	1	19
16	5	6	1	7		19
17	1	3	4	11	1	20
18	6	5	4	11	2	28
19		2	2	10	3	17
20			2	8	5	15
21～24	3	2	5	8		18
25～27	1	2	2			5
合計	36	53	28	63	12	192

出典：「瓊林義塾入門簿」から、全入門者231名中の出身地と年齢がわかる192名について作成。「豆田」は、豆田町、北豆田村、南豆田村を含む。

だろうか。²⁴ 明治前期は漢文教育に対する社会的なニーズが高まったといわれる。²⁵ 一八八〇年代から九〇年代初頭は漢学塾の設立が活発だったことが池田雅則によって指摘されている。²⁶ そうした背景のもとに瓊林義塾でも入門者を集めることができた時代であったといえよう。

しかし、開校当初の瓊林義塾の運営は不安定であった。というのも、塾生が納める入学金や月謝を収入とし、そこから家賃を支払った残額を姑南の給料に充てていたため、塾生数に左右される経営にならざるを得なかったのである。そこで、明治一五年二月には平野五岳や菽村ら地元の咸宜園旧門人八名が発起人となって、宜園保存会を発足させるべく、関係者に相談書が廻された。史料1は、五岳から広瀬青邨に送られ、国文学研究資料館に現存するものである。²⁷ もとの史料は、宜園保存会設立の趣旨を説明した前文と、諸手続方法について定めた一〇か条からなるが、ここにあげたのは前文の後半にあたる。なお、史料中の〈 〉は割書を示す。

史料1 明治一五年二月「宜園再興保存ノ儀ニ付淡窓先生門下諸君江相談書」

(前略) 就テハ今般銘々共協議ヲ遂テ宜園ヲ義塾ノ体ニ革メ旧規ヲ永遠ニ保存スルノ方法ヲ設ケ広ク醸金ヲ同志諸君ニ募リ其集額ハ〈何程ニテモ〉之ヲ永世据置金トナシ利子ヲ何歩トシ内何分ヲ即今費途ノ補助ニ供シ何分ヲ積立金トナシ之ヲ元金ニ合并シ漸次増殖スルトキハ後年ニ至リ右利子ノミヲ以テ宜園ノ旧規ニ合スル教師ヲ天下ニ求メ必ス其人ヲ得ラルヘキノ資本トナルニ至リ可申、如此永世保存ノ基礎相立候テコソ銘々共所謂本ニ報ヒ始ニ反ルノ道ニ相叶ヒ可申歟、右ハ諸君ニ於テモ御同様ノ訳ト相考ヘ御相談ニ及ヒ申候、尚御賢考モ可有之、御伏臆ナク御申聞可被下候、素ヨリ応募ノ諸君ハハ一々御協議ヲ遂ケ取斗方可仕積ニ御座候得共先ツ此節ハ創始ノ儀ニ付銘々共丈ニテ申極メタルノ手続方法左ニ記載仕候(後略)

義塾に改革したうえ、醸金を募り永世据置金にしてその利子を運用することで「永世保存ノ基礎」を確立しようとしたのである。保存会の目的が咸宜園の旧規に適合した教師を招くことにあったことがわかる。醸金の取り扱いについては第四条に具体的に記されている。醸金は限町か豆田町の信用できる者に預け、その預け金から生じた利子に、醸

金で買い入れた田地（保存田）からの作得米を合わせたものうち、四割を積立金として元金に合併し、三割を教員給料に充て、残る三割を家屋修繕費や書籍購入費に充てるといふ計画であった。第三条には日田郡の会員を「内会員」、郡外の会員を「外会員」とすることが定められており、義塾の運営方針については内会員を中心に評議によって決められることになっていた。

宜園保存会は計画にとどまらず、実際に機能した。問題が起きた際に会合が開かれていたことは諸史料から確認できる。²⁸ 外会員として東京在住の旧門人や咸宜園関係者からも醸金が集められた。「咸宜園東京保存会醸金趣意書」によれば、「東西ノ社友心ヲ協セ維持保存ノ方法ヲ謀リ淡窓先生ノ遺範ヲ永遠ニ伝ヘ国家教育ノ一助ニ供セン」との呼び掛けに、元日田県令の松方正義や在京旧門生の島惟精・長芑・清浦奎吾ら一四名が応じて、合計一一二〇円を集めている。

以上のように、瓊林義塾は、淡窓の門人である村上姑南を教師とし、淡窓時代の塾則を踏襲し、旧来通りの漢学教育を実践していたことから、淡窓時代の咸宜園教育の再現を目指していたとみられる。しかし、明治一五年から「町村立私立学校等設置廢止規則」の施行に際して行政による私立学校教則の審査が始められた。「大分県年報」によれば、同年に一八校について「其教則ノ如キ目下弊害等生スヘキモノアルヲ見スト雖、教員ノ学力自ラ偏スル所アリ教科書等不適当ノモノアルヲ免レス、一々審査改正ニ着手セリ」とある。翌一六年も一五校について「前年来毎校ノ教則ヲ調査シ教科書等迂闊無用ノ分ヲ除キ力ヲ実益ニ用キシメ稍觀ヲ改ムルニ至レリ」と、教則の審査が進められていた。²⁹ 瓊林義塾も例外ではなかっただろう。明治一六年八月三〇日に「宜園再興塾則改正」のことで集会が開かれているから、³¹ 淡窓時代の塾則を継続することが難しくなり、対応を迫られたのではないだろうか。

宜園保存会を発足させたことが奏功したのか、明治一五年の入門者数は八〇名、全塾生数も一一二名に達した。翌年の入門者数も七一名を維持した（表一参照）。しかし、塾生が宜園保存会と対立することもあったようで、姑南の日記「災後記事」によれば、明治一六年二月一五日に二二名の塾生が退塾する事件が起きた。前日に塾生を講堂に

集めて、保存会員の「衆議」として、ひとりの塾生の退塾処分を伝えた。その際に「塾支一切建言則許之、然而其処分也、在師之權也、子等宜甘受之乎」と説明したが、塾生二人が「師命果正」と言い放ち、ほかの二〇名も不服を申し立てたため悉皆退塾を命じられたのである。家塾であった江戸時代の咸宜園塾主と違って、義塾の教師は地位が低下せざるを得なかったのだろう。姑南が説論することによってまもなく二二名の帰塾が許されたが、表1で明治一五・一六年の退学者数が多いのは、こうした内紛が影響しているのかもしれない。

「瓊林義塾入門簿」の最後の日付は明治一七年九月三〇日となっている。同年一〇月に広瀬貞文が東京から一時帰郷し、咸宜園再興についての会合が持たれたので、その頃には貞文が咸宜園を引き継ぐことが決まったのだろう。³² 姑南は、瓊林義塾を去った後、遅くとも同一九年に隈町に学思義塾を開校し、月旦評を採用した漢学教育を継続した。³³

2 普通学科の模索

(1) 咸宜園の再興

次の史料は、年代ははっきりしないが、おそらく明治一五年末か一六年の早いうちに、東京在住の旧門人長茨・秋月新太郎から福岡県在住の旧門人吉富亀次郎（一八三六—一九一四、号は復軒）に対して咸宜園教師を依頼したときの書状の部分である。

史料2 年欠筑後田主丸吉富亀次郎宛長茨・秋月新太郎書状³⁴

（前略）同氏（姑南―引用者註）の育英に携るや、多年の経験なきに非ずと雖も、亦十分なりとも不可謂事有之に付、今般同地五岳師始め有志の輩奮起し、総代として諫山東作外一名、青村氏を迎え同塾に臯比を占めしめんとして態々出京有之候処、同氏は家政向等無抛処種々様々情実有之当時山梨県の聘に応じ校長相勤居候得ば、今一兩年の処は到底日田に帰り親ら教導の職に任ずる能わず、為之総代の志願も水滸に属し、如何にも残念の事に

有之候、就而旧門生之中可然人物を選択し一時の缺を補はんと評議を尽し候得共、老者は己に不中用、壮者は或は官途に有る等に而適當の人物無之苦心仕居候（後略）

諫山菽村らが、広瀬青邨を日田に呼び戻して咸宜園を再興しようと画策していたことがわかる。青邨は、安政二年（一八五五）三月に淡窓の養子として咸宜園塾主を継承したものの、文久元年（一八六一）に咸宜園を出たあと、府内藩の藩校で教えた。明治期に入ると京都府や宮内省に勤め、一〇年に東京に移って東宜園を開校した。一五年二月に山梨県徹典館の校長に就いたばかりだったことから、一、二年は日田に帰れないと菽村らの依頼を断った。そのため、復軒を招聘しようと右の書状が認められたのだろう。復軒は、嘉永六年（一八五三）一月に咸宜園に入門し、わずか二年半後の安政二年七月末に三権九級下に到達して一〇月末に準都講に、同三年三月に都講となった。明治初期に藩学教官や小学校教員を勤めた後、一五年九月に田主丸中学校校長に就いていた。復軒が咸宜園の教師に就いたことは確認できないので、おそらく彼にも断られたのだろう。そのうえ、明治一七年二月に青邨が死去した。

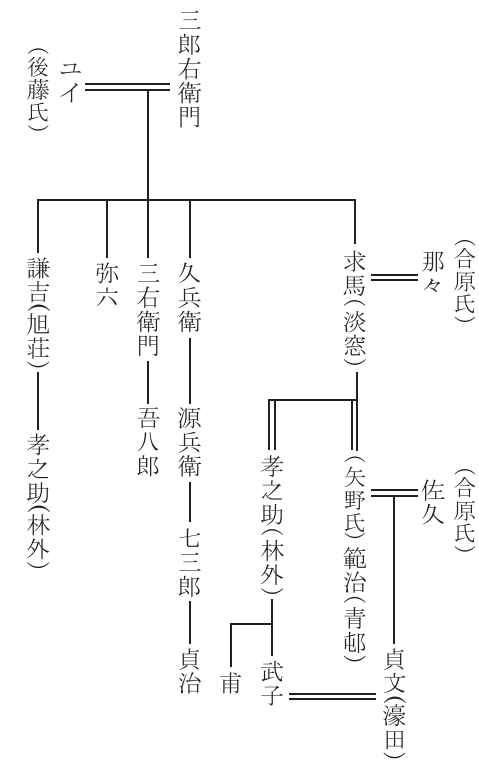


図1 広瀬家略系図

出典：日田郡教育会編『増補淡窓全集下巻』（思文閣、1971年）、広瀬恒太『日田御役所から日田県へ』（帆船コウ、1969年）などをもとに作成。

濠田は、咸宜園で林外から学び、明治四年四月に七級上に達した。青邨に付いて京都で過ごした際には京都府立中学校で学んだとされる。同八年一〇月から同十一年二月まで慶應義塾で学んだ後、千葉県属、司法省属、大審院書記などを勤めた。一七年末に退職して、翌一八年一月に家族とともに日田に移った。二月九日に瓊林義塾校主の椋野元卓から濠田への変更が、三月一六日には咸宜園への改称が、ともに大分県令に届けられた。³⁸

こうして、広瀬家の校主によって咸宜園が再興されることになった。明治一八年二月一〇日付で菽村や姑南のほか豆田町・隈町の商家など有志二六名の連名による咸宜園開校式案内状が配られ、二月二二日に咸宜園講堂で開校式がおこなわれた。³⁹ その三日後には二五名が入門した。三月に入ると濠田は塾生数名を連れて広瀬本家を訪れ、同家に残っていた蔵書をすべて咸宜園東家に運んだ。⁴⁰

同年中の入門者総数は一三三名に達した。出身地別にみると、大分県が六六名、九州地方（大分県以外）が三七名、九州外が一〇名である。大分県内の内訳は、日田郡四五名（豆田一一・他町村三三）、他郡二一名となる。九州以外では、東京、長野、岐阜、愛知、広島、山口、愛媛などに及ぶ。九州外出身者のなかには、濠田関係者や遊学以外の目的で日田に寄留しながら入門した事例が含まれるが、五月に愛媛県から入門した竹内直（一九歳）のように「幼少の頃より漢学を好⁴¹」んで遊学した者もいた。九州を越えた地域から遊学目的でやってくる事例は濠田校主時代が最後までみられる。また、年間入門者数一三三名は、咸宜園開設全期間中第五位に入る多さである。そういった意味では、この時期が再興後咸宜園のピークといえよう。ただし、瓊林義塾から引き継いだ塾生が二七名を占めていた。⁴²

咸宜園の教師は、表1に示したように、明治一八年に二名、一九年に三名と記録されている。複数の教師が咸宜園での教授をどのように分担したのかは不明である。校主兼教師である濠田のほかに、菽村を教師として届け出ているかもしれない。⁴³ また、一八年九月には福岡県から井上栄（一八二七—一八八、号は昆江）が招かれ、翌年まで教師を勤めた。昆江は天保一四年（一八四三）に咸宜園に入門し、その年のうちに二権五級下へと急速な昇級を遂げた。弘化三年（一八四六）一月には舎長準都講に任ぜられ、二権九級下に達した後、同四年初めに大帰した。その父直次

郎も咸宜園門人で、文政一〇年（一八二七）頃から筑後国御井郡に柳園塾を開設し、昆江が同塾を継承していた。⁴⁴ 昆江が咸宜園にやってきた直後の九月から一月にかけて入門者数が三〇名に及び、そのうちの一九名を御井郡を中心とする福岡県の出身者が占めているのは、柳園塾の塾生が昆江に追隨してやってきたためであろう。

廣瀬資料館には、濠田が咸宜園を再興したときに作成したと伝えられる「塾則・咸宜園規約」が残されている。⁴⁵ 同規約の項目は、職掌・出入・賞罰・財用・飲食・舎則・雜則・外来生心得から構成されており、一見したところ「瓊林規則」に似ている。しかし、文体が訓読文になり、起床や就寝などの時刻が定時法に基づいて厳密に規定されるなど、形式的には一新されている。と同時に、内容についても「瓊林規則」を部分的に踏襲しながら全体的にはかなり改められている。職掌・出入・飲食・舎則には、「瓊林規則」の各項目の規約を簡略化あるいは部分修正して採用されたものが少なくないが、賞罰・財用・雜則・外来生心得は新しく作成されている。

内容がかなり改変されているとはいえ、「塾則・咸宜園規約」では、職掌の項目に「通計監ハ毎月廿九日通計人ト共ニ師家ニ会シ課業試業ノ点数ヲ通計シ翌月ノ月旦評ヲ製スヘシ」と、舎則に「席替ハ毎月月旦評ニ従フヘシ」と規定されており、従来通りの月旦評による昇級制が継承されている。職掌で規定された都講以下の職務の記述からは、輪読や輪講、会読といった方法が採られていたこともわかる。

（二）英語・数学の導入

これまでみたように、明治一三年の瓊林義塾開校以来一八年の咸宜園開校当初に至るまで、旧来通りの漢学教育が継続されていたが、一九年に濠田は英語と数学を導入した。その背景には当時の英語流行や漢学衰退といった社会的風潮があったと考えられるが、直接の契機は教英中学校の廃校であった。明治一九年「中学校令」によって地方税による尋常中学校が府県一校に限られ、町村立中学校も認められなかったことから、教英中学校は四月に廃校となった。そこで、濠田は「当塾学科中予科トシテ英教之二科ヲ加ヘ教授仕度候」として「元教英中学校蔵書中英書并数学書借

用仕度」と日田郡長に願い出た。⁴⁷ 同校蔵書のうち英書と数学書を咸宜園に借用しようとしたわけである。濠田は一八年九月から同校の校長を兼務していたので、蔵書の内容を熟知していた。英語と数学を「予科」としているのは、廃校になって行き場を失った同校の生徒を受け入れるための方策だったと考えられる。五月の入門者数は一か月としては多い一九名に及んだが、そのなかには、教英中学校からの転入生が少なくなかったのではないだろうか。⁴⁸ たとえば、同校生徒だった石田貞彦は廃校直後に咸宜園に入門している。ただし、元生徒だけでなく咸宜園塾生のなかにも英語や数学を学ぶ者は存在した。明治一八年五月に入門した穴井繁太は、二一年五月に退塾するまで漢学のみならず数学や英語を学んでいたことが明らかである。⁴⁹

明治一九年七月には教英中学校蔵書の借用が許可された。旧蔵書は、二〇年七月に同校跡に開校した日田郡高等学校の所有となり、⁵⁰ 現在は日田市立咸宜小学校に所蔵されている。旧蔵書を見れば、咸宜園でどのような英書や数学書が使用されたのか知ることができると考えて調査してみたが、関連する書籍はほとんど見出せなかった。⁵¹ いっぽう、現存する咸宜園の旧蔵書や蔵書目録からは、当時、英語や数学に関する書籍が加えられた形跡はみられない。⁵² 咸宜園で英語や数学を教授する場合には、旧教英中学校蔵書に頼るしかなかったはずだが、英書や数学書が残っていないところをみると散逸したと考えざるを得ない。

濠田は、慶應義塾で学び、後に内務省警保局で外国新聞の翻訳を担当した⁵³ ことから、英語に精通していたことは確かである。咸宜園で英語教授を担当したのは濠田に違いない。しかし、濠田は明治二〇年五月一五日に上京し、六月から内務省警保局五等属に就いた。⁵⁴ 旧門人らは、「咸宜園ノ看板御卸不申様ニ致し度」という思いで、諫山菽村に後事を託することを決定した。⁵⁵ 菽村は豆田町の医者諫山安民の長男として生まれた。天保八年（一八三七）から咸宜園で本格的に学び始め、同一五年一月に四権八級下に達した。筑前の亀井塾に遊学後、肥後や京都で医学を学び、三四歳で日田に帰って父親とともに医業に従事した。父親も淡窓の門人であった。⁵⁶ 菽村は早くから、いわば裏方として咸宜園の再興に熱心に取り組んできたが、濠田の突然の上京を受けて、二〇年六月に咸宜園東家へ移居し、遂に校

主に就いたのである。当時、六三歳であった。

濠田がいなくなったため英語教授は中止されたが、継続させることが五月末の宜園保存会で評議された。九月に熊本県から矢野俊彦が招かれ、英語と数学の教授が一六日に再開された。矢野は二一歳の「洋学教師」であった。どうい経歴を持つのかは不明である。着任早々の一〇月から日田郡高等小学校を參觀したり、咸宜園塾生を同校に引率して理科実験を見学させたり、両校生徒の交流を始めたという。⁵⁷⁾ 矢野の目的は、同校の所有となっていた旧教英中学校蔵書中の英書や数学書を見ることであつたのかもしれない。

明治二一年一月発行の『大分県公立教育会雑誌』に、「咸宜園ハ有名なる広瀬淡窓翁の跡なる私塾にして目今漢学英語算術等⁽⁵⁸⁾の諸科を教授し居れり、生徒四五十名内外なる由、教員漢学ニハ淡窓翁の門人諫山某、英語算術には矢野俊彦氏等なりとぞ⁽⁵⁸⁾」とあり、菽村が漢学を、矢野が英語と算術を担当していたことがわかる。

(3) 中学校の代替

菽村が咸宜園を継承してまもない明治二〇年一〇月に「咸宜園学則」⁵⁹⁾が改正された。同学則は、「大分中学校規則」に即した形式を備えている。一四年(一八八二)七月に文部省から出された「中学校教則大綱」に準拠して各府県は中学校教則を制定したが、大分県は全国で最も遅く一八年五月に「大分中学校規則」(以下「大分規則」と略記)を制定公布した。⁶⁰⁾ 教英中学校ではこれに準拠した教則を作成したであろうが、同校の校長だった濠田が「大分規則」を咸宜園の学則に改編し、それを菽村が引き継いだのではないかと考えられる。

「大分規則」は、目的、学科、学科課程、教科用書、修業期限、授業要旨、試業法及卒業証書、生徒定員及入学退学、学費、生徒心得、舎則、罰則の一二章五五条から構成されていた。それに対して、「咸宜園学則」は、通則、学年并ニ教則、試験規則、入校退校規則、寮内規則、生徒心得、勸懲例の七章七四条から成る。⁶¹⁾

記載形式は共通しているものの、具体的な記述内容は異なる。目的について、「大分規則」第一章目的第一条は「本

校ハ忠孝彝倫ノ道ニ基キ中人以上ノ業務ニ就キ或ハ高等ノ学校ニ入ル者ノ為メニ必須ノ学科ヲ授クル所トス」として
いるのに対して、咸宜園では次のように規定している。

史料3 「咸宜園学則」第一章通則第一条

本園ハ成学ノ志ヲ抱キ不得已官公立学校ニ就学スル能ハサル者ヲ教養シ左ノ三項ヲ知ラシムルヲ以テ其目的トス
一 忠臣(本位)ヲ主トシ礼讓ヲ重ス

一 倫理ヲ正シ忠孝ヲ励ム

一 知識ヲ拡メ事業ヲ立ツ

咸宜園は官公立学校に就学できない一四歳以上（第四章第三〇条）の生徒を教養し、忠信や礼讓を知らしめ、倫理を
正し、知識を広めることを目的として設定している。

年間六〇回実施される小試験の成績によって座次が決定し、二回実施される大試験によって等級が定められる
（第三章第一七・一八条）点や、「競文会競算会」（第二章第一〇条）や演説討論を目的とした「会話」（第二章第一一
条）がそれぞれ毎週一回行われる点などは、かつての咸宜園教育を彷彿させる。しかし、全体的にみると、月旦評に
よる昇級制は消えて咸宜園の独自性は後退し、学年制・学期制や祝祭日休業制などが取り入れられて、よりフォーマ
ルな学校に近づけられたといえよう。

特に学科課程に大きな変化があった。表3でわかるように、漢学中心から普通学科を教える学校に性格を変えよう
としていた。従来の漢学教育が修身・歴史・文学といった学科のなかに吸収されてしまい、伝統的な輪読・輪講や会
読といった学習方法が表面上消えてしまった。すでに導入されていた英語や数学に加え、中学校の学科編成にあわせ
て多様な学科が組み込まれている。

「大分規則」における修業年限は、初等科が四年（八級）、高等科が二年（四級）であるが、「咸宜園学則」は五年
で各年が前後に分かれていた。表3の咸宜園学科課程と比較するために、「大分規則」初等中学校の各学科について

左に示す。配当された等級の数(表3の「総計」に対応)を算用数字で示し、その下に毎週時間の四年間合計を漢数字で表した。

修身8—1六、歴史8—1六、和漢文8—四九、英語8—四八、地理5—1〇、物理2—四、生理2—四、化学2—四、経済2—四、算術3—1二、代数5—1〇、幾何5—1一、図画8—1六、習字4—八、体操8—二四、総計二四八時間

修業年限が異なるので単純に比較はできないが、「咸宜園学則」が歴史、英語、算術、代数、習字の時間をより多く設定していることは明らかである。特に英語については、「大分規則」が四八時間の設定であるのに対して、「咸宜園学則」は二倍の九六時間に達する。歴史は、「大分規則」では諸学科中九番に位置づけられたが、「咸宜園学則」では修身に次いで二番になり、配当時間も二倍近くに及んでいる。それに対し、図画や体操などは少ない。それまでの咸宜園が公立学校に代わって漢学教育を担ってきたように、ここでは、英語や数学関連の時間を多くすることで独自性を打ち出そうというねらいがあったのではないだろうか。

「咸宜園学則」と「大分規則」は、各学科授業要旨では共通する部分が多い。咸宜園は、算術・代数・幾何・三角法については「大分規則」の文言をほぼそのまま採用している。英語・地理・歴史・習字・体操については部分的に「大分規則」を採用している。修身・文学・生理・化学・経済・図画などは咸宜園独自の記述がなされている。修身の要旨をあげれば、次のようである。

史料4 「咸宜園学則」第二章第一五条第一款修身

修身ハ人生ノ大本ニシテ身ヲ立テ道ヲ行ヒ皇国ノ臣子タル本分ヲ尽サシムルノ基礎ナレバ幼時ノ涵養尤緊要ナリトス、是レ本校学科ノ主項ニ置ク所以ニシテ其教授ハ聖賢ノ格言ト德行トニ依リ躬行実践ヲ主トシ孝悌忠信礼義廉恥等ノ事ヲ知ラシメ倫理ヲ正シ大義ヲ明ニシ己ヲ成シ物ヲ成スノ道ニ達センコトヲ要ス、抑彼ノ經典ノ如キハ所謂一字千金ノ味アルモノニシテ其不尽ノ意ノ存スル所ニ至リテハ敢テ翻訳言語ノ及フ所ニ非ス、人々自ラ其蘊ヲ

表3 成宜園学科課程表

通計	躰操	習字	図画	三角法	幾何	代数	算術	経済	化学	生理	地理	英語	文学			歴史	修身	学/学期
													2	2	6			
33	2	3					5				2	6	2	2	6	3	2	前
	兵式躰操	楷字					加除乗除 雑題				日本地誌要略	綴字書 第一読本 習字 書取	公文文 書簡文	日常書説 暗誦暗書	素説 四書	国史綱要	幼学綱要	毎週時間
33	2	3					5				2	6	2	2	6	3	2	後
	全上	全上					諸等 小数	分数			全上	全上 書取 第二読本 会話	全上	全上	五経 素説	全上	全上	
33	2	2	2				6				2	8	2	2	4	3	前	
	全上	行草	自在画法				諸比例				万国地誌略	會話 書取 英文典 中地理書	作文併二 仮名交り文	暗誦暗書 文章軌範	正統日本外史	小学		
33	2	2	2		2		6				2	8	2	2	3	2	後	
	全上	全上	全上		初歩		開立法 百分算				全上	全上 并二 作文	全上	全上	全上	全上		
31	2	2	2		2		3			2		8	2	2	2	2	前	
	全上	全上	地面画法		直線角 平面幾何 角形 幾何総論	四術	求積 級数			弗氏生理書		并二 万国史 作文	第四読本 英文典 万国史	全上	全上	正統十八史略	論語	
34	2	2	2		2		5			2		10	2	2	3	2	後	
	全上	全上	用器画法		全上 比例円	四術	分数 乗法			全上		全上 并二 植物書	全上	孟子	全上	全上		
35	2	2	2		2		5			2		12	2	1	3	2	前	
	全上	細字	全上		全上 応用 円ノ積	乗法 一次方程式 根数	方程式 一次方程式			物理全誌		并二 米国史 植物書 修辭書 作文	第五読本 植物書 米国史	漢文 東萊博議	万国史記	本朝通鑑	大学	
31	2				2		5			2		12	2	1	3	2	後	
	全上				面ノ交接 立体幾何 立体	二次方程式 方程式	方程式 二次方程式			全上		全上	全上	全上	全上	中庸		
32	2		2		2		4			2		13	2	1	2	3	前	
	全上		対角用法		常用曲線 幾何応用 立体綴 全上	級数 順列	級数 順列		有機化学			マコレーヘス 英国史 チンク伝 動物書 作文	全上	謝選拾遺	全上	易经		
30	2		2						2	2		13	2	1	3	3	後	
	全上		三角算		対角用法				宝氏経緯書	無機化学		マコレーヘス イブ伝 文明史 憲法文 作文	全上	全上	日本教記	全上		
325	20	16	10	4	12	21	25	2	4	4	4	8	96	24	24	29	23	
10	7	5	2	6	5	5	5	1	2	2	4	10	10	10	10	10	10	総計

出典 首藤助四郎「改正成宜園規則」『敬天』八一・九七九年、一六〇一七頁から書式を一部変更した。

究ムルニ非レバ道腰ヲ味フ「ヲ得ス、是各級ニ通課シテ温見講読殊ニ懇懇ヲ加ヘシムル所以ナリ、

修身では、經典の蘊奥を究めることを重要視している。表3の学科課程表においても、修身では第一年で『幼学綱要』、第二年で『小学』、第三年で『論語』、第四年で『大学』、『中庸』、第五年で『書経』、『易経』を扱うことになっていた。

「大分規則」において初等中学科第一・二年で『小学』、第三・四年で『論語』が教科用図書として指定されて全学年を通して嘉言善行が教えられることになっていたので比べると、咸宜園はより多くの經典を採用していたことがわかる。修身のこのような内容や先述した歴史重視の傾向にみられるように、当時においても咸宜園は漢学塾の性格を残していたといえる。

以上のような咸宜園の改革の背景には、明治十九年「中学校令」によって大分県下の尋常中学校が一校に限られたことがあった。その状態は明治二六年まで続いた。日田郡においても、先述したように教英中学校が廃校となったため、中等教育を希望する者は日田を出て遊学せざるを得なかった。咸宜園は、中学校に代わって普通学科を教える役割を担うことを目指していたと考えられる。

中学校一校体制が続いた明治二〇年代において、私立学校のなかには咸宜園のように英語や数学を取り入れるところが増えた。明治二五年に大分県内にあった私立学校一六校のうち五校が普通学科を取り入れていた。⁽⁶²⁾ そうやって普通学科を導入した私立学校が命脈を保ったなかで、咸宜園では早くも明治二一年八月頃には英語や数学を取り止めざるを得なかったようである。⁽⁶³⁾ 「咸宜園学則」は机上の空論に終わった。⁽⁶⁴⁾

菽村は周旋人九名とともに、明治二一年九月に「咸宜園十年維持有志簿」を作って資金を集めようと計画した。そこには、「時勢ノ推移ル数十年前ノ漢学耳ニテハ行ワレス、若シ強テ之ヲ行ウモ国家ニ対シ利ナキ耳ナラス却テ害ヲ生ルモ計リ難シ、因テ旧朋友及当郡有志者ニ計リ英学及理化学教師ヲ聘セントス」とある。瓊林義塾開塾期間には姑南らと共に淡窓時代の漢学教育に拘泥していた菽村だったが、時代の趨勢にに応じて、漢学教育のみでは国家に対してむしろ有害であるという認識に変化していたことがわかる。そこで、英学や理化学の教師を招聘しようとするも資金

がないため、旧門人や有志に寄付金を募った。咸宜園を一〇年間維持することが目的であった。というのも、第四代塾主広瀬林外の次男甫(当時一四歳)が成長して咸宜園主となるまでに一〇年間が必要とみなされていたためである。もともと、明治二〇年五月に濠田が咸宜園を去ったとき、濠田と有志らの協議で咸宜園を甫に継がせることになったが、甫が若年だったことから菽村が中継ぎとして校主に立ったようである。義塾となった明治期においても、咸宜園校主にはあくまでも広瀬家の人が就くべきだと考えられていたのである。

「咸宜園十年維持有志簿」には三四名の名前が列挙され、そのうちの二五名から合計二二一円が寄付されている。寄付金は広瀬七三郎が無利子一〇年割で預かることになっていた。周旋人や寄付人のなかには、豆田町・隈町の商人や僧侶などが名を連ねている。彼らのなかには、草野忠右衛門、森甚左衛門、大蔵伊平二といった高額納税者も含まれていた。しかし、広瀬本家を初めとして江戸時代に豊富な財力を有した商家の多くが、明治期にはすっかり衰退してしまっていた。⁽⁶⁵⁾ 地元だけでなく、東京の旧門人からも送金があったようだが、さらに菽村は明治二四年四月に東上して一六九〇円を集めた。⁽⁶⁷⁾ それでも資金が不足したのか、あるいは適任者が見つからなかったのか、結局、英学や理化学の教師を招聘することはできなかった。

菽村校主時代の入門者総数は九九名であった。そのなかで出身地と年齢がわかる九三名について表4にまとめた。表2の瓊林義塾時代と比べると年齢層が高く

表4 菽村校主時代の入門者の年齢と出身地

年齢	大分県		他府県			合計
	日田郡		他郡	九州	九州以外	
	豆田町	他町村				
11		1		1		2
12		1		1		2
13		4	4			8
14	2	4	1	2		9
15	2		1	2		5
16	3	2	2	7	1	15
17	1	2	5	3	3	14
18		3	3	2		8
19	1	2	2	3	1	9
20		2	1	1		4
21~24		2	2	4		8
25~37		1	3	5		9
合計	9	24	24	31	5	93

出典：咸宜園入門簿（『増補淡窓全集下巻』所収）をもとに、明治20年6月～25年4月に入門した99名のなかで出身地と年齢がわかる93名について作成。

なっている（平均一八歳）。日田郡からの入門者に一三歳以下がないのは、明治二〇年七月に開校した日田郡高等小学校に入学者が流れたためと考えられる。九州では、福岡県が七割以上を占め、佐賀、熊本、長崎からもやってきた。九州以外では岐阜、広島、愛媛県の出身者が含まれる。明治二三年六月に村上姑南が死去したことで、姑南が日田郡内に開いていた学思義塾から一時的にまとまった入門者があつた程度で、全体的にみれば塾生は減少の一途をたどった。菽村は体調不良のために二五年四月に咸宜園を閉鎖したとされ、五月以降の入門者は確認できない。

3 地域密着型の漢学教育

(1) 咸宜園の再開

咸宜園は、勝屋馬三男（一八七〇—一九三三、号は明浜）が教師として招かれたことよつて再開されたが、その時期や経緯は不明である。開校について大分県に届けられなかったためか、『大分県学事年報』にも記録はない。明治二九年五月から入門者を受け付け始めたことは、入門簿が残っているから確実である。明浜は佐賀県藤津郡の出身で、中学校で学んだのち、明治一八年に咸宜園に入門した。一九年一月に郷里に帰り、二〇年から谷口藍田（淡窓門人）の塾で漢学を学んだ。⁷⁰

明浜時代にどのような教育がおこなわれていたのか、その手掛かりは明治三〇年一月に発行された「日田新報」に掲載された記事と広告しかない。

史料5 「咸宜園の月旦」〔日田新報〕六九

◎咸宜園の月旦 本月月旦表に昇級を得たる生徒は如左、日田の文学追々復活の運に向へり、諸子勉旃

加二級下佐藤直作 橋本香列、日野保田、加一級上林觀吾^{肥前}、中尾猶之^{豊前}、秦省三^直、加一級下平野能吉^{日田}、

史料6 咸宜園広告（『日田新報』六九）

今勝屋紫明先生ヲ聘シ授業
般ヲ擴張セリ

昼間 左伝、四書五経ノ講義、外史、
十八史ノ独見会、詩文章ノ試業等

夜間 統文章軌範ノ藏書生徒ノ借
覽ヲ開講アリ数百箱ノ藏書ヲ覽ス

豊後日田 咸宜園

月旦評による昇級制が採用されていたことや、四書五経などの講義、『日本外史』や『十八史略』などの独見、漢詩文の試業など、旧来通りの漢学教育がおこなわれていたようすがうかがえる。

明治一三年瓊林義塾開校から同三〇年咸宜園閉鎖までの入門者の数と出身地を、校主あるいは教師の別に示すと表5のようになる。^①総数五六八名のなかで大分県域の三五六名の占める割合は六三%に及び、そのうちの七割近くを日田郡出身者が占めた。近世期の咸宜園は全国各地から入門者を集めたが、再興後の門人分布は九州、とりわけ大分県域に縮小した。明浜の門人は四八名にとどまり、しかも大分県内からの入門が多く、日田郡出身者が六割近くを占めた。唯一九州外の岡山県の出身者であった小島寿吉も、印刷技術者として日田郡朝日村に寄留していた時に入門したことが高倉芳男によって指摘されている。地域密着型の漢学塾へと回帰したといえよう。^②明治二九年には四〇名を超える入門があったが、翌三〇年になると半年の間にわずか六名の入門者にとどまり、振るわないまま、咸宜園は九月に閉鎖された。

菽村の代から衰退の一途をたどり、明治三〇年に完全閉鎖に追い込まれた

表5 教師（校主）別にみた塾生の出身地の変化

		村上姑南 1880(明治13)・3 ～1884・9	広瀬濠田 1885(明治18)・2 ～1887・4	諫山菽村 1887(明治20)・6 ～1892・4	勝屋明浜 1896(明治29)・5 ～1897・6	計 (%)
大分県	日田郡	108 (46.8)	74 (38.9)	34 (34.3)	28 (58.3)	244 (43.0)
	他郡	35 (15.2)	39 (20.5)	26 (26.3)	12 (25.0)	112 (19.7)
九州 (大分県外)		74 (32.0)	63 (33.3)	34 (34.3)	7 (14.6)	178 (31.3)
九州以外		13 (5.6)	14 (6.9)	5 (7.7)	1 (2.1)	33 (5.8)
不明		1	0	0	0	1
計		231	190	99	48	568

出典：「瓊林義塾入門簿」および咸宜園入門簿（『増補淡窓全集下巻』所収）から作成。

塾生数は延べ人数。

九州：福岡11、佐賀27、熊本22、長崎16、宮崎1。

九州以外：愛媛7、岐阜5、広島5、兵庫4、山口3など。

ことは、全国的な漢学塾衰退の趨勢⁽⁷⁴⁾と軌を一にしたもので決して不思議ではない。しかし、咸宜園が振るわなかった要因には、日田郡の地域性も関係していたと思われる。

(2) 日田郡民の教育要求度

日田郡は、経済力が低く、貧富の差が大きい地域であった。まず、明治一四年において同郡の選挙権所有者（直接国税納入額五円以上）の人口千人比は大分県下最低であり、被選挙権所有者（直接国税納入額一〇円以上）の人口千人比は下から二番目という低さであった。総じて富裕者の比率は県下で最低であった。また、日田郡では早くから農業従事者の階層分化が進んでいた。一六年の自作農家は二六％、小作農は二三％、自作は五一％であつて、小作の割合は県下平均の二倍を超えていた。いっぽう、二四年の大富豪（市町村税賦課対象額一万円以上）は、大分県下五四名のうち日田郡が八名を占めていた。⁽⁷⁵⁾

経済力の低さは劣悪な就学状況に結びついた。日田郡の学齢児童の就学率は大分県下一二郡で最低であった。明治二〇年に二九％で、最高の郡より二八⁽⁷⁶⁾、県平均より一四⁽⁷⁶⁾も低かった。二五年には四二％に上がったが、最高の郡より一八⁽⁷⁶⁾、県平均より一〇⁽⁷⁶⁾低かった。三五年に至っても、県下で日田郡のみ九〇％台に届かなかつた。⁽⁷⁶⁾大分県の就学率は明治三四年まで全国平均より低い状況が続いたから、日田郡は全国的にみても劣悪だったといえる。ましてや上級学校への進学希望も低かつた。明治二九年の調査によると、日田郡では高等小学校二学年を終えた男子生徒一六四名のうち中学校へ入学を希望するのがわずか八名という結果であつた。⁽⁷⁷⁾つまり、日田郡民の教育要求度は、高等小学校までで十分だといふレベルにとどまっていたといえる。

もちろん中等教育以上を目指す人びとがいなかつたわけではない。高等小学校が設置されてから明治二九年までに日田・玖珠両郡で輩出した卒業生一七四名のうち八〇名は上級学校に進学した。その進学先は、県内では大分尋常中學校（二三名）、県外では東京帝国大学（五名）のほか、熊本九州学院（七名）、長崎の第五高等学校医学部（三名）、

愛知医学校（三名）などの医学系を中心に一二府県四〇校に及んだ。⁷⁸ 明治三三年の大分県内の中学校生徒数を郡別にみると、日田郡のそれは最も少ないながら三三名であった。⁷⁹ 日田郡において中等教育に進むのは、他郡他県に出て行く財力を持った一部の富裕層に過ぎなかったのである。

おわりに

本稿でたどってきた明治期の咸宜園について、役割と衰退・閉鎖の要因の観点からまとめよう。

明治二三年の瓊林義塾開校から一八年の咸宜園開校直後の時代は、漢学教育への需要の高まりを社会的背景として、淡窓時代を踏襲した教育をおこなうことで独自性を発揮できた。公教育の普及しつつあった時代だからこそ、普通学科教育を担う小学校や中学校と棲み分けながら、漢学を教育するという役割を全うすることができたのである。

明治一九年以降は、英語教育への需要が高まっていたにも関わらず「中学校令」を機に府県一校体制が続いた。大分県下でも二六年まで大分尋常中学校（大分郡所在）に限られた。咸宜園では、同じ日田郡内にあった教英中学校が廃校となったことから、その蔵書を借用して生徒の一部を受け入れ、英語と数学の教授を開始した。さらには、中学校に代わって普通学科を教育する学校へと改革を目指した。咸宜園は漢学専門から脱却して塾生を増やそうとしたのだらうが、同時期の日田に学思義塾や日田郡高等小学校が存立したことから、生徒は分散した。それでも三校は役割を分担することによって均衡を保った。学思義塾は淡窓を踏襲した漢学教育に徹し、咸宜園は公立学校に就学できない一四歳以上を対象としたからである。この時期の塾生のなかには、退塾後に上京して英吉利法律学校などに進学した者を確認できる。⁸⁰ 一時的にせよ咸宜園は上級学校に接続する役割を果たしたといえよう。塾生の進路の全体的な傾向については本稿では明らかにできなかったので、今後の課題としたい。

明治二二年の八月頃には、普通学科は遠く及ばず、英語・数学の教育ですら頓挫してしまった。洋学教師を招聘で

きない状態では、従来の漢学専門に戻るしかなかった。明治期の咸宜園を支える主軸であった菽村が死去すると咸宜園も終わるはずだったが、明治二九年に再開された。もはや全国的に漢学塾は斜陽の時代に入っていたから、まもなく完全閉鎖されたのは自然な結末である。

咸宜園の衰退、閉鎖の要因としては、慢性的な資金不足やそれと関連して普通学科を担う教師を招聘できなかったこと、日田郡民の教育要求度が低かったことがあげられる。江戸時代の咸宜園は、淡窓が教授に専念し、独特の教育システムを構築したことで、全国から入門者を集めて拡大発展した。軌を一にして広瀬本家が掛屋として著しい成長を遂げたこと(81)から、咸宜園は本家のバックアップのもとで安定した経営がおこなわれ、青邨や林外へと継承された。しかし、明治七年に林外が死去し、広瀬本家も廢藩置県前後の変動によつて経営規模が急激に縮小したため、咸宜園は閉鎖された。咸宜園は天領日田と運命を共にしたといえよう。

広瀬(淡窓)家の家塾であった江戸時代と異なり、明治期は旧門人らによる醸金と評議によつて義塾として運営がおこなわれた。塾の性格が大きく変わったが、日田には再興後の咸宜園を維持するだけの経済力は残していなかった。また、旧門人の間には広瀬家の校主を望む声が強かったが、長く日田を離れていた青邨は帰らず、貞文は数年で咸宜園を去ってしまった。明治時代の咸宜園は、旧門人らの熱意で再興されたものの、実態との齟齬が噛み合うことはなかった。

註

(1) 海原徹『広瀬淡窓と咸宜園―ことごとく皆宜し―』ミネルヴァ書房、二〇〇八年、i頁。咸宜園教育研究センター監修『図説咸宜園―近世最大の私塾―』日田市教育委員会、二〇一七年。

(2) 咸宜園に関する一九八〇年代までの研究動向については、三澤勝己「広瀬淡窓研究史試論」(『國學院雜誌』八六(六)、一九八五年)や田中加代「広瀬淡窓研究とその課題」(『広瀬淡窓の研究』ペリカン社、一九九三年、序章)に整理

されている。その後の研究成果については、『咸宜園教育研究センター研究紀要』二〇一八（二〇一三年）二〇一九年の巻末に掲載された「咸宜園関係参考文献」によって把握できる。

- (3) 本稿では、明治一三年の瓊林義塾開校を以て咸宜園再興ととらえる。明治一二年に園田謙吾（一八三四—一九〇、号は鷹城）によって再興されたとする中島市三郎著・中島三夫編『咸宜園教育発達史』中島国夫一九七三年、二〇二—二〇三頁）があるが、本稿ではそれを採用しない。中島は、明治二三年に発刊された雑誌「咸宜園」第一集の「沿革略及雑事」に「明治十二年ニ至リ門人園田謙吾村上姑南相繼テ再ヒ瓊林莊ヲ開キ遺規ニ因テ生徒ニ授ク」と記されていることや園田鷹城婢文（大分県玖珠郡玖珠町末広神社「園田鷹城先生之婢」）に日田で五年間にわたって開塾したと記されていることを根拠に、園田鷹城を第六代塾主に指定している。また、『月隈教育百年史』にも、「五岳上人は、それらの人々に頼まれ、園田鷹城に請うて正式に梶にも届け、第六代宜園教授となつてもらい再興を図った」（『月隈教育百年史』編集部編『月隈教育百年史』日田市立月隈小学校、一九七五年、六六頁）とある。

中島があげた二つの根拠以外にも、明治二七年に発行された小野藤太『日田歴史』（小野藤太発行）に「咸宜園ハ廢藩ノ時、一旦廢塾セシガ、明治十二年ヨリ淡窓先生ノ門人、園田謙吾、村上姑南、相繼テ書生ヲ教ヘ」（四五頁）と記されている。『咸宜園』は咸宜園関係者によって発刊された雑誌であり、小野藤太は豆田小学校教員の時に広瀬家に直接取材に赴いている（『明治二十七年日記』（廣瀬資料館所蔵、281—17）の一月二九日条）ことから、それぞれの記述は信頼できるように思われる。しかし、鷹城が咸宜園の教師を勤めていたことを裏付ける史料は現在のところ確認できていない。

大分県の学事年報や統計書にも明治一二年に咸宜園が再興されたことを示す記録は見られない。「旧幕府領地内家塾」（国文学研究資料館所蔵、84—141、84—142）に「明治十一年ニ至リ、門人某再ヒ瓊林莊ヲ開キ」とあって、鷹城の名はないものの、明治一二年に瓊林莊が開設されたことが記されている。しかし、「学事年報諸表」（複製本、大分県公文書館所蔵、2001032086）に掲載された明治一年の大分県管内私学校表のなかに瓊林莊はない。以上を勘案して、本稿では、咸宜園再興を明治一三年とする。

- (4) 中島市三郎は、文化一四年開設時から明治三〇年閉鎖時までの咸宜園教師を、初代淡窓↓二代旭莊↓三代青邨↓四

代林外↓五代唐川即定↓六代園田鷹城↓七代村上姑南↓八代広瀬濠田↓九代諫山菽村↓一〇代勝屋明浜と一貫して塾主ととらえている(前掲註3、二〇二―二一四頁)。しかし、江戸期に広瀬(淡窓)家の家業として伝えていた塾主と、後述するように明治期の義塾に改革したあとの校主とは全く性格が異なる。また、濠田と菽村は咸宜園校主であったことが確かだが、姑南は校主ではなく、明浜の位置づけは不明である。そのため、本稿では右のようなとらえ方を採用しない。

- (5) 高倉芳男「咸宜園最後の講師 勝屋明浜先生」『大分県地方史』五六、一九七〇年。森真理子「咸宜園塾頭諫山菽村宛来簡の書誌的研究」(平成三・四年度科学研究費補助金一般研究C研究成果報告書)、一九九五年。森によれば、かつて日田市で諫山菽村関連書簡・文書が約三〇〇点発見されたというが、現在、日田市において史料は所在不明である。溝田直己「史料紹介「広瀬青邨文庫」(国文学研究資料館所蔵)にみる咸宜園関係の新出史料について」『咸宜園教育研究センター研究紀要』七、二〇一八年。

- (6) 入江宏「明治前期「漢学塾」の基本的性格」幕末維新时期漢学塾研究会・生馬寛信編『幕末維新时期漢学塾の研究』溪水社、二〇〇三年。池田雅則「私塾の近代―越後・長善館と民の近代教育の原風景」『東京大学出版会』二〇一四年。明治期の私塾に関する研究には以下のようなものがある。千原勝美「明治初期漢学塾の様態とその性格」漢魏文化研究会編『東洋学論集』内野博士還暦記念『漢魏文化研究会』一九六四年。星野三雪「私塾「大江義塾」の教育活動とその特質」『教育学研究』四四―一、一九七七年。神辺靖光「日本における中学校形成史の研究 明治初期編」多賀出版、一九九三年。Margaret Mehl「明治時代の教育における漢学塾の役割」張寶三・楊儒賓編『日本漢学研究初探』勉誠出版、二〇〇二年。小久保明浩「塾の水脈」武蔵野美術大学出版局、二〇〇四年。関口直佑「明治初期における東京の私塾―同人社を中心として―」『社会学論集』一二、二〇〇八年。川原健太郎「近代の私塾における同窓生の研究―突疑塾を対象として―」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』一八―二、二〇一一年。

- (7) 高野澄「咸宜園―広瀬淡窓―」奈良本辰也編『日本の私塾』淡交社、一九六九年、一三四頁。杉本勲「豊後日田の広瀬家史料の調査によせて」『日本歴史』二七二、一九七一年、一三四頁。

- (8) 日田郡教育会編『増補淡窓全集』上・中・下巻、思文閣、一九七一年(復刻版)。入門簿のほかに、淡窓日記や規約も『増補淡窓全集』に収載されている。本稿で淡窓日記という場合には、『増補淡窓全集』に収録されたものをいう。

(9) 財団法人廣瀨資料館先賢文庫の史料は、廣瀨家蔵書と咸宜園蔵書に分けて『廣瀨先賢文庫目録』（廣瀨貞雄監修、中村幸彦・井上敏幸編、廣瀨先賢文庫、一九九五年）に掲載されている。廣瀨家蔵書はさらに家宝書と一般書に分けられている。本稿で使用するのは家宝書のうちの「廣瀨本家日記」（2811）、「源兵衛雜記廣瀨家記筆写」（2913）、「林外日記」（5111）、「塾則・咸宜園規約」（114411）、「元教英中学校書籍借用之儀ニ付御願」（114413）、「咸宜園十年維持有志簿」（114414）などである（一）内は、各史料の架蔵番号を示す。以下同様。「廣瀨本家日記」については、「明治十三年日記」（28113）から「明治二十七年日記」（281117）（函架番号は、廣瀨貞雄監修、中村幸彦・井上敏幸編『廣瀨先賢文庫家宝書詳細目録』廣瀨先賢文庫、二〇一八年による）を使用した。「塾則・咸宜園規約」以下三史料については、鈴木理恵『咸宜園系譜塾の展開に関する実証的研究―西日本を中心として―』（平成二五年度・二九年度科学研究費補助金基盤研究C研究成果報告書）、二〇一八年、一一二―一一五頁、一一六頁、一二三頁に翻刻した。

国文学研究資料館廣瀨青邨文庫の史料は、青邨子孫の吉川孔敏氏によって寄贈されたものである。廣瀨青邨文庫について詳しくは大野雅之「史料紹介」淡窓先生手書克己篇」にみる廣瀨淡窓の苦惱―末弟旭莊のこと―」（『史料館研究紀要』一五、二〇一〇年）を参照。本稿で使用するのは、「旧幕府領地内家塾」（84141、84142）、「宜園再興保存ノ儀ニ付淡窓先生門下諸君江相談書」（84143）、「咸宜園學則」（84146）である。これらは、田中晃「宜園雜記」（『敬天』一二、一九八三年）四四〇四六頁、溝田直己前掲註5の七四〇七五頁、七五〇七七頁、七九〇八七頁、鈴木前掲報告書の一一〇頁、一一六―一二二頁に翻刻されている。

咸宜園教育研究センターに所蔵される史料は、村上姑南に関連したものである。そのうち、本稿では「瓊林義塾入門簿」、「庚辰改正瓊林義塾規則」、「姑南詩稿甲卷」、「災後記事」などを使用する。

(10) 後述するように、諫山菽村らは明治一五年二月に宜園保存会を発足させて瓊林塾を義塾とした。厳密に言えば、これ以降を瓊林義塾、以前を瓊林塾として区別すべきであろう。しかし、開校当時からすでに旧門人らの協議に基づいて運営されていたことから、本稿では全期間を通じて「瓊林義塾」の名称を採用する。

(11) 明治一五年二月「宜園再興保存ノ儀ニ付淡窓先生門下諸君江相談書」。

(12) 姑南については、大分県教育会編『大分県人物志』歴史図書社、一九七六年、三五七―三五八頁および『増補淡窓

全集下巻』（前掲註8）収載の淡窓日記による。

(13) 瓊林義塾開校の経緯は、「姑南詩稿甲巻」に記されている。

(14) 土方苑子編『各種学校の歴史的研究』東京大学出版会、二〇〇八年、四三頁。

(15) 「瓊林義塾入門簿」は、原簿でなく写しである。一〇行罫紙に、ひとりにつき二行にわたって、入門年月日・住所・氏名・年齢・紹介人名などが記されている。写しであることに注意を払いながら使用する。

(16) 「明治十六年大分県統計書」によれば、一三年の生徒数は三〇名と記されている（表1参照）ことから、「瓊林義塾入門簿」に記載されていない入門者がいたのかもしれない。なお、大分県の統計書や学事年報は国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧した。

(17) 明治一三年二月二八日に開校し（「明治十三年日記」同日条）、一四年六月二九日に校舎が落成するまで授業は咸宜園跡でおこなわれた（高倉芳男「教英中学の研究」『日田文化』一六、一九七三年、四一頁。「月隈教育百年史」編集部編前掲註3、六七頁）。

(18) 「瓊林義塾入門簿」の表紙に「欲興瓊林塾也、初寓上手農戸山某宅、而移旧山本院大蔵氏而卜居旧官府外、遂来往」と記されている。「明治十四年日記」四月一日・二三日条。また、同日記の六月六日条には「村上塾」が「下中城旧宜園」の地にあったことが記されている。

(19) 「明治十三年日記」五月一五日条。明治七年に作成された目録によれば、咸宜園蔵書は約五〇〇冊に達した（咸宜園蔵書については前掲註9鈴木理恵報告書を参照）。瓊林義塾に貸し出された書籍の冊数は不明だが、一六箱に及んだ。

(20) 淡窓日記の天保一二年三月五日条に新令（「職掌規約」「職掌告諭」「改正規約」）を頒布したと記されている。「辛丑改正規則」は、中島市三郎によって『教聖廣瀬淡窓の研究』（増補改訂版）（第一出版協会、一九三七年）の巻末増補部分に翻刻されている。

(21) 「辛丑改正規則」にあつて瓊林義塾で採用されなかつたのは、職任で一則、飲食で五則、出入・用財で各一則、雑で二則である。出入の「導引之者ハ夜行願相済候上出ハ舍長二届ケ帰り深更ニ及ビ候ハバ夜番二届ケ着帳可致事、但昼出テ夜帰ルモ為同様事」に代表されるように、時代の変化に対応して削除したと考えられる。

- (22) 山本佐貴「咸宜園における漢詩講釈の展開」『教育学研究紀要』四五(一)、一九九九年。
- (23) 広瀬恒太『日田御役所から日田県へ』(帆足コウ、一九六九年) 第二部第三項口絵(五五)に掲載された写真③「教英中学入学願書と許可」による。貞治は明治一六年五月に瓊林義塾に入門した。一八年以降も咸宜園に継続して通い(『明治十八年日記』三月一日・九月一日条)、教英中学校入学時には三級上を卒業していた。
- (24) 学制期に各地でそうした修学スタイルがあったことは小久保明浩「学校教育制度の成立と塾」(前掲註6『塾の水脈』)によって指摘されている。
- (25) 漢文訓読体が公式文書に採用されて広がりをもせたことや、それと関連して師範学校の入学試験をはじめとする諸試験に漢文が課されたことが背景にあると指摘されている(千原勝美「漢籍・読書・漢文考」『中国文化・漢文学会会報』四二、一九八四年)。また、猪口篤志は、明治の前半期に漢詩壇が活況を呈したとしてその理由を、当時の著名人がよく詩をつくったこと、私塾の成立と詩社の林立がみられたこと、漢詩を発表する出版物(雑誌・詩集・新聞など)が増えたこと、中国との交通が開けて人士の往来が盛んになったこと、としている(『日本漢文学史』角川書店、一九八四年)。
- (26) 池田雅則前掲註6、八一頁。
- (27) 史料の冒頭に「壬午三月十五日達五岳到来東添ヒノ規則書也、山梨県寓居中儀範治」と朱書きされている。
- (28) 「広瀬本家日記」(『明治十五年日記』)→「明治二十二年日記」、千原藤一郎「日記」(九州大学記録資料館所蔵、千原家文書1146、1156、1159)、村上姑南日記「災後記事」などによれば、明治一五年四月、同一六年八月・十二月、同一七年一〇月、同一八年一月・八月、同二〇年五月・九月、同二二年二月に会合が開かれている。なお、千原家は、江戸時代には日田の掛屋で森・小倉・島原藩などの御用達を勤めた豪商であったが、明治時代以降は養蚕伝習所、炭田、釧路木挽所、書画売買などの諸事業で家の再興をはかった(九州大学九州文化史研究施設編『九州文化史研究 究所所蔵古文書目録十(千原家文書一)』九州大学文学部附属九州文化史研究施設、一九七九年、凡例)。
- (29) 「明治十七年日記」の遊紙のあとに、印刷された同史料が貼付されている。
- (30) 明治一四年・一五年・一六年の大分県年報(『文部省第九年報二冊』六三一頁、『文部省第十年報二冊』七三九頁、『文部省第十一年報二冊』七二八頁。いずれも文部省編、宣文堂、一九六六年(復刻版))。

- (31) 千原藤一郎「日記」(九州大学記録資料館所蔵、千原家文書1156) 八月二三日・三〇日条。
- (32) 「明治十七年日記」一〇月一日条。村上姑南が教師を勤めた時期について、中島市三郎は明治一五年までの二年間とし、咸宜園教育研究センターもこれ採っている(中島市三郎前掲註3、二〇四頁。咸宜園教育研究センター監修前掲註1、四三頁)。広瀬恒太は、明治一七年までとするが、その根拠を示していない(前掲註23、二二七頁)。しかし、本稿で見たように広瀬貞文が咸宜園を再興する前年の一七年まで姑南が教師を継続したことは明らかである。
- (33) 『大分県統計書』によれば、学思義塾の一九年の生徒数は四〇名、二〇年は三〇名、二一年は二六名、二二年は二三名と記録されている。なお、学思義塾の明治二一年六月の月旦評が咸宜園教育研究センター監修前掲註1、六一頁に掲載されている。
- (34) 菽村は明治一五年一月に上京している(「源兵衛雜記広瀬家記筆写」。千原藤一郎「日記」、九州大学記録資料館所蔵、千原家文書1152)ことから、史料2の書状は、その後記されたと考えられる。
- (35) 中島市三郎前掲註3、二〇七頁。この書状について、中島は所蔵先や作成経緯などについて一切記していないことから史料の価値に疑問が残るが、当時の内実を知る重要な手掛かりとなるので本稿ではあえて使用した。
- (36) 青邨の経歴については、吉川孔敏編・発行『廣瀬青邨詩鈔』、一九七〇年による。東宜園については、田中晃「東宜園規則及び入門簿」『敬天』八、一九七九年および宮崎修多「私塾本立書院(東宜園)」『江戸文学』二一、一九九九年を参照。
- (37) 吉富復軒の経歴については、淡窓日記、安政三年「林外日記」、「吉富復軒先生小伝」(浮羽史談会編・発行『浮羽先哲遺芳』、一九一五年、五三・五四丁)による。
- (38) 濠田の経歴については、大分県に提出された「学校主変更二付伺」に添付された履歴書や「改称御届」(「明治十八年 諸届書 学務課」、大分県公文書館所蔵、2001032220)、広瀬恒太前掲註23の二二四頁、「明治十八年日記」一月一二日条による。
- (39) 「明治十八年日記」二月一〇日・二二日条。
- (40) 「明治十八年日記」三月一日条。
- (41) 『愛媛県人物名鑑第一輯松山市・温泉郡之部』海南新聞社、一九二三年、一五一頁(竹内菊五郎)。

- (42) 咸宜園の年間入門者数の推移は、咸宜園教育研究センター「監修前掲註1、八四頁「入門年別の内訳」による。瓊林義塾から咸宜園に移った塾生については、「瓊林義塾入門簿」と咸宜園の入門簿を対照して共通する塾生数を導き出した。
- (43) 萩村は、「明治十四年日記」四月四日条によれば、瓊林義塾において講釈を担当したことがあった。あるいは、「明治二十一年日記」四月二十九日条に「諫山矢野両教師及び宜園諸生不残長谷東上二付及離盃」と記されていることから、「長谷」という教師が存在した可能性もある。
- (44) 昆江が咸宜園に来たことは、「源兵衛雑記広瀬家記筆写」明治一八年九月三〇日条に記されている。また、「昆江先生墓碑銘」に「明治十八年、淡門之徒、再興宜園、衆議邀先生為師、於是寓豊後、所至皆称善誘。十九年辞職」（倉富了一編・発行「昆江井上先生」、一九三七年、一頁）と記されている。
- (45) 「塾則・咸宜園規約」の表紙に貼付された紙片に「本塾則ハ貞文ノ筆書セルモノニテ明治十八年全人ノ咸宜園再興時ニ其塾則トシテ調査セルモノノ如シ（昭和二年三月査）」と記されている。
- (46) 麻生千明「明治20年代における高等学校英語科の実施状況と存廃をめぐる論説動向」『弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要』三二、一九九六年。
- (47) 明治一九年「元教英中学校書籍借用之儀ニ付御願」。
- (48) 中島市三郎は、「明治十九年教英中学校が閉ざされると、その生徒の中、十二名の咸宜園塾転入を許可している」（前掲註3、二一〇頁）とするが、根拠を示していない。
- (49) 石田貞彦と穴井繁太の履歴書（「銓衡明治三十年〜三十八年」、大分県公文書館所蔵、1996010374）による。ただし、石田貞彦は咸宜園入門簿に記載されていない。穴井繁太履歴書については、池田雅則「コラム 近代における私塾の変容」（咸宜園教育研究センター「監修前掲註1、一四二頁）が山口県文書館所蔵のものを紹介している。
- (50) 「月隈教育百年史」編集部編前掲註3、八〇・一三三頁。
- (51) 二〇一八年一二月に日田市立咸宜小学校が所蔵する教科書類を調査し、「教英中学」の印記がある一三三冊を旧教英中学校蔵書と特定した。そのなかでは、『日本外史』『史記評林』『皇朝史略』などの歴史関連書が五〇冊と最も多い。旧教英中学校蔵書には英語や数学に関連する書物が少なくなかったと思われるが、一三三冊のうち英語関連書は一

冊、数学関連書は四冊にとどまる。

- (52) 明治期再興後に購入されたとみられる書籍(鈴木理恵「咸宜園蔵書目録対照表」、前掲註9、(35)・(37)頁の書籍で、広瀬青邨文庫所蔵の蔵書目録に掲載されておらず、『増補淡窓全集下巻』中の蔵書目録に記載があるもの)のなかに洋学(英語や数学)に関するものはない。唯一『増補算法闕疑抄』五卷五冊が数学に関連する。

- (53) 明治二〇年一月に書かれたとみられる光吉文龍宛広瀬濠田書状(首藤助四郎「光吉文龍所蔵「豊後日田広瀬家関係書簡」」『敬天』九、一九八〇年、二七頁)に「小生ハ内務省警保局へ本年六月より奉職、外国新聞之翻譯内地新聞雑誌之検閲ニ従事致居候」とある。光吉文龍(旧名は森秀三、咸宜園門人)については、溝田直己「史料紹介 光吉文龍述『旭莊公逝去前後ノ日誌』について」『咸宜園教育研究センター研究紀要』二、二〇一三年を参照。

- (54) 「明治二十年日記」五月一五日条。濠田が内務省警保局五等属に就いたことは「源兵衛雑記・広瀬家記筆写」明治二〇年五月二七日条によるが、『明治二十年職員録(甲)』(内閣官報局、一八八八年)の「内務省」欄に濠田の名はない。二一年・二二年の同職員録には掲載されている。当時の警保局長は咸宜園門人の清浦奎吾であったから、清浦から誘いがあったのかもしれない。

- (55) 千原藤一郎「日記」(九州大学記録資料館所蔵、千原家文書126) 明治二〇年五月一三日条。濠田は、咸宜園を去ったことについて、光吉文龍に宛てた書状で「小生日田ヲ去ルノ理由(中略)難申上内情も有之」(首藤助四郎前掲註53、二七頁)とのみ記して、詳しい事情は語らない。二一年三月発行の『大分県共立教育会雑誌』三九に「咸宜園は広瀬貞文を校主とし諫山東作之を幹理す」(四五頁)とあるので、濠田はこの頃まで形式的には校主であったのかも知れない。なお、『大分県共立教育会雑誌』は大分県立図書館所蔵の複製本による。

- (56) 吉田博嗣「咸宜園門下生略伝(二) 諫山菽邨」『咸宜園教育研究センター研究紀要』三、二〇一四年。「日田の先哲」編集委員会編『日田の先哲』日田市教育委員会、一九九六年(一九八四年初版)、九五〜九六頁。

- (57) 矢野俊彦については、『明治二十年日記』九月一三日・一六日条や『月隈教育百年史』編集部編前掲註3、八一頁による。

- (58) 『大分県共立教育会雑誌』三七、三六頁。

- (59) 「咸宜園学則」は、首藤助四郎が紹介した「改正咸宜園規則」(光吉家文書)と内容はほぼ同じである。「咸宜園学則」

は朱書きで修正が施されている部分があることから、未定稿であろう。それに対して、「改正咸宜園規則」は、首藤が「光吉俊治が在塾中、その父であり、かつて咸宜園に学んだ光吉文竜が、咸宜園規則を写しとっていたものと推定」している（「改正咸宜園規則」『敬天』八、一九七九年、一頁）。明治一九年末に咸宜園に入門した光吉俊治の家に残されていた「改正咸宜園規則」は塾内に頒布された完成版であったと考えられる。「改正咸宜園規則」は未見であるため、本稿では「咸宜園学則」を採用した。ただし、首藤が紹介した光吉家文書には、国文学研究資料館所蔵史料に欠けている咸宜園学科課程表が掲載されていることから、これについては光吉家文書に拠った。

(60) 四方一洸『中学校教則大綱』の基礎的研究』梓出版社、二〇〇四年、五九頁。大分県教育百年史編集事務局編『大分県教育百年史 第三巻資料編一』大分県教育委員会、一九七六年、八二九～八四九頁。

(61) 「大分中学校規則」は全五五条とはいえ、一か条が細分化されている場合があるため、「咸宜園学則」より分量が少ないわけではない。

(62) 『明治二十五年大分県学事年報』、二二頁。

(63) 矢野俊彦は、明治二年五月～七月頃に日田郡高等小学校の英語を週一六時間、日給三〇銭で囑託担当した。しかし、八月には他の教員に代わっている（江藤弘「高等小学開校当初の課業」『日田文化』三〇、一九八七年、八〇頁）ので、日田を去ったのではないかと考えられる。

(64) 註59で述べたように「咸宜園学則」は、門人光吉俊治の家に同じ内容の「改正咸宜園規則」が残されていることから、塾内に頒布されていたのは確かなようだ。しかし、どこまで実際に機能していたのかはなはだ疑問である。

(65) 日田市編・発行『日田市史』、一九九〇年、五三九～五四〇頁。

(66) 「明治二十二年日記」八月六日・二二日条によれば、長茨や横井忠直らから「元宜園保存会金利子」一〇〇円が送付されている。

(67) 「源兵衛雑記広瀬家記筆写」明治二四年四月一日条。明治二四年四月二二日付千原夕田宛諫山菽村書状（広瀬恒太前掲註23、第二部第二項口絵（四〇）写真⑦、一三四頁）。

(68) 入門簿によれば、明治二三年一～六月の入門者数は四名にとどまるが、七～二月は一九名に及びその前後と比較して入門者数が多いので、学思義塾から塾生を引き継いだものと考えられる。时期的には後になるが、学思義塾の

元塾生で咸宜園に入門した例として水谷晋策があげられる。水谷は学思義塾閉鎖後は日田郡有田簡易学校雇教員となっていたが、二四年五月から同校勤務のかたわら咸宜園で漢学を修めた（水谷順行「咸宜園門人伝（五）水谷晋策の生涯」『敬天』一〇、一九八一年。ただし、咸宜園入門簿によれば、入門したのは二四年八月であった）。

(69) 吉田博嗣前掲註56、八七頁。

(70) 高倉芳男前掲註5。

(71) 『増補淡窓全集下巻』の入門簿では明治二〇年六月以降の入門者一二名を濠田への入門者として扱っているが、本稿では菽村への入門者とみなした。

(72) 咸宜園全期間の入門者総数にしろめる大分県域出身者の割合は約三六％である（咸宜園教育研究センター監修前掲註1、八七頁の別表2「都道府県ランキング」をもとに算出。別表2には姑南時代の入門者数は含まれていないため、加えて算出した）。

(73) 高倉芳男前掲註5、八三頁。日田市教育庁世界遺産推進室編『廣瀬淡窓と咸宜園―近世日本の教育遺産として―』日田市教育委員会、二〇一三年、六二頁。

(74) 池田雅則前掲註6、八一頁。

(75) 日田市編前掲註65、五六九頁。末広利人「日田県政の展開」大分県総務部総務課編『大分県史 近代篇Ⅰ』大分県、一九八四年、六五〜六六頁。

(76) 日田市編前掲註65、五八三頁。大分県教育百年史編集事務局編『大分県教育百年史 第一巻通史編Ⅰ』大分県教育委員会、一九七六年、四九〇頁。

(77) 大分県教育百年史編集事務局編前掲註76、五二二頁の第19表による。同様の調査については、米田俊彦「大分県東国東郡」（『近代日本中学校制度の確立―法制・教育機能・支持基盤の形成―』東京大学出版会、一九九二年）二〇一頁の第3―6表でも紹介されている。

(78) 明治二九年「県立尋常中学校設置ノ義ニ付願」（九州大学記録資料館所蔵、千原家文書（28））による。同史料は、明治二九年に大分県各地で県立中学校の誘致運動が展開されたときに、日田・玖珠両郡の町村長が連名で知事宛に出した請願書に添付されたものである。また、同年の『大分県通常会日記上』（大分県立図書館所蔵）には、「現今他

府県ニ遊学セル者員數ハ（中略）日田郡三十九人（七丁ウ）とある。中学校設立問題については、永添祥多「明治中期・大分県会における中学校論議―中学校設立問題を中心として―」『大分県地方史』一六四、一九九六年を参照。

- (79) 本校二校、分校四校、計六校の郡別生徒数は以下の通りである。西国東郡七九、東国東郡一一九、速見郡二〇四、大分郡二五四、北海部郡一九九、南海部郡四四、大野郡八二、直入郡一九三、玖珠郡四三、日田郡三三、下毛郡二二一、宇佐郡二六三、他府県八九、合計一八三四名（広瀬恒太前掲註23、一六五―一六六頁（もとは「日田新報」三三年一月一四日号による））。

- (80) 跡田直一（明治一八年五月入門）は明治二二年に上京して英吉利法律学校に入学した（本耶馬溪町史刊行会編『本耶馬溪町史』本耶馬溪町、一九八七年、一〇四五頁）。また、明治三三年一月発行の『咸宜園』第一集に、当時在京修学していた宜園門下九名（多くは明治一八年から一九年の入門者）が上がつている。明治二七年八月発行の「日田新報」二四号（一八頁）でも、麻生行三（一八年二月入門）が慈恵医院医学校、平野円（一八年二月入門）が明治学院に進学したことがわかる。

- (81) 野口喜久雄「日田商人広瀬家の経営」杉本勲編『九州天領の研究―日田地方を中心として―』吉川弘文館、一九七六年（初出は一九七二年）。

- (82) 末広利人前掲註75、六八頁。

付記 本研究はJSPS科研費J P 2 5 3 8 1 0 2 9・J P 1 8 H 0 0 9 7 9の助成を受けたものです。

本稿作成にあたり、日田市立咸宜小学校、公益財団法人廣瀬資料館、咸宜園教育研究センター、大分県公文書館、大分県立図書館、九州大学記録資料館、国文学研究資料館などに所蔵される史料を閲覧させていただきました。ここに深謝申し上げます。